

三 山 木 弥 生 式 遺 跡

発 掘 調 査 報 告

1 9 6 8

京都府田辺町教育委員会
京都府田辺町文化財保護委員会

三山木弥生式遺跡 発掘調査報告

本文目次

序文	京都府田辺町文化財保護委員長	村田 太平	3
	京都府立城南高等学校長	永田 正光	4
凡例			2
第1章	位置と環境		6
第2章	調査経過と日誌		9
第3章	竪穴式住居址		15
第4章	遺物		17
	(1) 弥生式土器		17
	(2) 異形青銅器		23
	(3) 鉄製刀子		24
	(4) 鉄器片		25
	(5) 石器類		25
第5章	総括		26

図版目次

図版 1	1 三山木弥生式遺跡遠望	29
	2 竪穴式住居址全景	29
図版 2	1 異形青銅器出土状況	31
	2 鉄製刀子出土状況	31
図版 3	1 弥生式土器、砥石出土状況	33
	2 弥生式土器出土状況	33
図版 4	金属器と石器	35
図版 5	弥生式土器(其の1)	37
図版 6	弥生式土器(其の2)	39

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡分布図	7
第 2 図	遺跡周辺図	11
第 3 図	遺跡より平野眺望	12
第 4 図	弥生式土器出土状況	13
第 5 図	鉄製刀子(矢印)出土状況	13
第 6 図	竪穴式住居址実測図	16
第 7 図	竪穴式住居址南半部	16
第 8 図	弥生式土器実測図	18
第 9 図	弥生式土器実測図	20
第 10 図	弥生式土器実測図	22
第 11 図	異形青銅器実測図	23
第 12 図	鉄製刀子実測図	24
第 13 図	鉄器片、石鏃、石庖丁実測図	25
第 14 図	砥石実測図	25
第 15 図	砥石	25
第 16 図	サヌカイト剝片	26
第 17 図	サヌカイト剝片実測図	26

凡 例

1. 本調査報告書は昭和41年7月23日より7月30日にわたって調査した、京都府綴喜郡田辺町大字三山木小字高木の弥生式遺跡の調査結果をまとめたものである。
2. 発掘調査は田辺町文化財保護委員会の依頼により京都府立城南高等学校地歴部、田辺中学校郷土調査部との共同調査で、城南高等学校教諭山田良三、田辺中学校教諭粟野謨が指導したものである。
3. 本調査の遺物は城南高等学校地歴部で整理を行ない、同志社大学考古学研究室に移管した。
4. 青銅器の復原には国立奈良文化財研究所の佐原真、工楽善通両氏に御足労をわずらわした。
5. 本調査報告書は城南高等学校教諭山田良三が執筆担当し、京都府田辺町教育委員会と田辺町文化財保護委員会によって刊行した。
6. 図の縮尺はm又はcmによった。

序 文

わが田辺町を含む山城南部一帯の地方は、古代人の住居跡や古墳がたくさんあり、すでに発掘調査されたものも多く、本書第1章にその大体が記されている通りである。しかしまだ調査されていない地下に眠ったままのものも少なくないと思われるが、最近、土地開発の名のもとに行なわれる土建工事の為に、潰滅の危機に在るものゝ多いのは我等の心をいため、今のうちに早く手を打つことの必要を痛感せしめるものである。

今度調査された「三山木弥生式遺跡」は、私らが少年の頃天神山と呼び、以前には神社のあった処であるが、すでに開発工事が進行中で潰滅の一步手前まで来ていたのである。本会がこの状態を知って調査を委嘱した人々、即ち山田、粟野両氏を中心とする一団の人達は、此のさしせまった事情の下、特に土地所有権の移動もからまって頗る困難の多い時にあたり、真に学問研究の熱意に燃えて、折からの炎暑にもかかわらず、慎重丁寧に調査を進められて立派な成果をあげ、こゝにその詳細を報告されたのは真に感謝にたえないところである。発掘そのものも多大の労苦であるが、こゝまで報告書をまとめられたその努力に対しても、深く敬意を表する次第である。

本研究がわが田辺町の古代史に貴重な一節を加えたことは申すまでもないが、広く山城の古代史研究に寄与する点も大きいと確信する。

本会は此の報告書によってその厚意を記憶すると共に、本書が各方面において十分に活用されることを念じ、序とします。

昭和42年11月15日

田辺町文化財保護委員長

村 田 太 平

序 文

埋蔵文化財は民族の文化的遺産であると共に、その国の歴史を物語る資料でもあり、過去の経緯を知るうえに欠くことの出来ないものである。こうした遺跡、遺物を追求し、保存顕彰し後世に継承することは現在のわれわれに課せられた重要な課題の一つである。

昨夏、近鉄の「筒城ヶ丘住宅地」造成工事に伴い遺跡が発見され、地元田辺町文化財保護委員会の依頼により、本校山田良三教諭指導のもとに城南高校地歴部と田辺中学校粟野諱教諭、郷土調査部がこの緊急調査に当たった。

今回の調査は弥生式時代の住居址一基と云う小地域の調査にとどまったが、その成果は大きく、山城地方で最初の完全な竪穴式住居址を完掘し、出土遺物も本邦に類例のない異形青銅器や鉄製刀子と云った貴重な資料である。

今日各地にみられる諸開発は社会情勢の進展と近代的都市改造への建設上必要な事であるとはいえ、一面遺跡の破壊につながるどころであり保存と開発という現実と直面し、幾多の問題を提起している。かゝる中であって本遺跡は同志社大学の校地となり、現状のまま保存され、破壊から免れたことは何より喜ばしく、今後の全面調査、研究に期待されるものが多い。

此の遺跡の発掘調査及び報告書の刊行等に関して、田辺町郷土史会長村田太平氏、同会幹事村井博氏に多大の御力添を頂いた。こゝに両氏に対し深甚な謝意を表明する次第である。亦京都府教育委員会の研究助成のあったことも特筆されなければならぬと考える。

更に、発掘以来、寸暇を綴って出土遺物や実測図の整理、製図等に心がけ報告書をまとめた山田良三教諭及び卒業生の平良泰久、地歴部員諸君の努力に対し、こゝにあらためて労を多としたい。

なお本書が学界のため幾分の裨益するところがあれば幸である。

昭和42年11月15日

京都府立城南高等学校長

永 田 正 光

第 1 章 位置と環境

遺跡は行政上は京都府綴喜郡田辺町大字三山木小字高木に位置する。南山城を南から北へ流れる木津川の左岸には生駒山から男山に延びる丘陵が存在する。此の丘陵地は田辺町三山木附近では普賢寺川の浸蝕によって形成された普賢寺谷がある。此の谷の溪口の北側、標高70～80米、平野からの比高35～40米の丘陵の尖端に遺跡は立地している。

南山城平野は木津川の堆積によって形成された谷底平野で、平野の両端には洪積層の丘陵地があり、背後には山地をひかえる地形をなす。此の木津川兩岸の丘陵地から平野に移行する地帯は幾多の上代遺跡が分布している。

縄文式文化の遺跡は未だ確認されたものは存在しない。遺物としては田辺町三山木山崎神社の御神体として祀ったと称す石棒^{註1}と石冠がある。共に青色泥板岩を磨いたもので石棒は約57種の両頭式である。石冠は退化形式のもので、出土状態を明らかにしないが、古くから祀ることは付近で採集されたものであろうと思われる。

三山木に接す南の精華町粕田及び相楽郡加茂町の国鉄加茂駅付近でも石棒^{註2}の発見が報じられている。

三山木の木津川の対岸にあたる井手町の台地では石槍と石匙が発見されている。^{註3}

田辺町の背後の甘南備山を越えた西側斜面には北河内の枚方市穂谷や同津田三ツ池の縄文式遺跡がある。^{註4}

此の様な遺跡、遺物の分布は南山城でも南部地域にすでに縄文式時代人の生活が始まっていたことを物語り、遺跡の発見も時間の問題であろうと思われる。

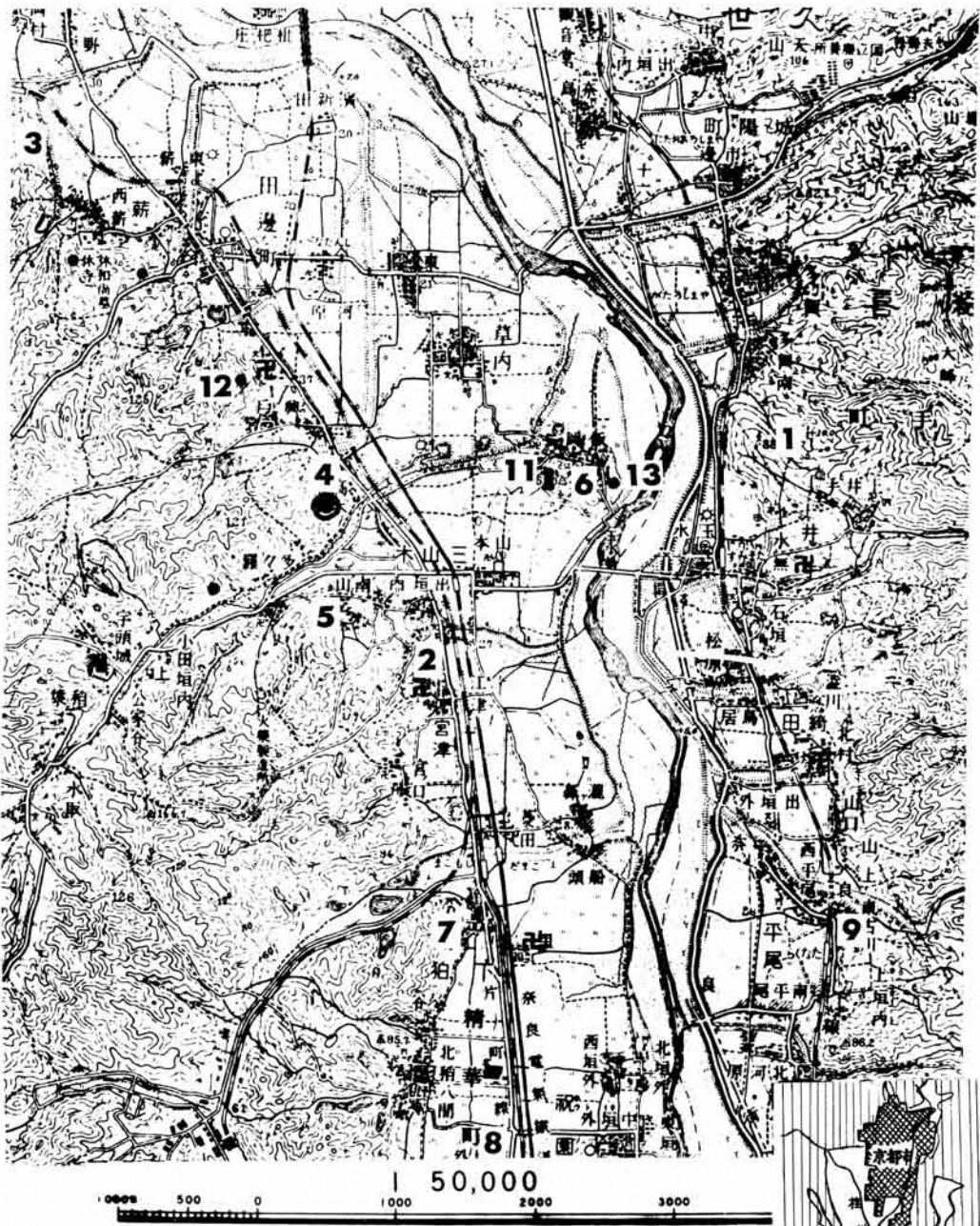
弥生式時代の遺跡となるとその分布は濃厚で、木津川流域で最も著名な遺跡は男山に近い丘陵上に立地する八幡町美濃山字井ノ元、通称金エ門垣内の遺跡で、唐古第Ⅲ様式の土器より土師器の時期まで続くもので、従来多数の石器類が採集されている。石斧、石庖丁、石鏃の他に有樋式石剣や銅鏃模仿の磨製石鏃がある。特に小型壺棺^{註5}の出土は注目値する。^{註6}

八幡町正法寺山では突線鈕^{註7}近畿2式の銅鏃^{註7}が単独で1個発見されている。その他八幡の丘陵地では南山、幣原、本郷の後期の遺跡群が存在する。^{註8}

八幡町の弥生式遺跡に接する田辺町大住向山では鉄剣形の磨製石剣、石斧及び弥生式後期の土器片が採集されている。^{註9} 亦田辺町田辺西薪の丘陵地では唐古第4様式と思われる土器が出土している。その中には高さ約40cm位の壺形土器の胴部に二次的に外から孔を穿ったものがある。有孔土器^{註10}がしばしば埋葬用に用いられている事及び近くで壺棺が発見されている例からみて壺棺の可能性が強い。

三山木弥生式遺跡と普賢寺谷を径て相対する南側の丘陵端の田辺町三山木南山ではサヌカイト剝片が、同三山木西糺で磨製太型蛤刃石斧1個が発見されている。^{註11}

同じ丘陵続きの精華町粕田で石庖丁、磨製石鏃^{註12}を、精華中学校校庭では石斧が出土している。^{註13}



第1図 遺跡分布図

- 1、2 縄文式遺物出土地 3～9 弥生式遺跡及び遺物出土地
 4 三山木弥生式遺跡 10 椿井大塚山古墳 11 飯岡車塚古墳
 12 寿命寺古墳 13 トゾカ古墳 ● 後 antiquarian 古墳群 ㊦ 寺院址

⊗ 三山木弥生式遺跡



三山木遺跡の東方の平野に独立丘陵の飯岡がある。此の飯岡の東斜面では弥生式後期の住居址の一部が発見されている。

木津川右岸では山城町湧出神社の石庖丁以外には確認されたものは発見されていない。^{註14}

古墳時代になると、田辺町の木津川をはさんだ対岸に椿井大塚山古墳^{註15}がある。大塚山は全長185米と云う長さが正しければ山城最大の古墳である。全長6.8米の竪穴式石室に38面の銅鏡が発見され、その大部分が三角縁神獸鏡類で、同型の鏡が九州から関東までの代表的な前期古墳に分布されていて、碧玉製腕輪類が伴出してないことから日本に於ける最初の高塚古墳であり、全国各地の首長に鏡を配布出来る大きな政治勢力を持っていた者の墳墓であると云われている。然し大塚山古墳が畿内の前期古墳のなかでとくに古いと断定できるきめ手はないとの反論もある。^{註16}

田辺町飯岡の車塚は丘陵の一部を利用した全長86米の前方後円墳で、内部構造は小形の竪穴式石室からなり盗掘されているが、多数の碧玉製石釧、車輪石、鍬形石や玉類が出土している。^{註17}

田辺町興戸の寿命寺古墳は三山木弥生式遺跡の北側の丘陵端にあつて直径約27米のなだらかな円墳で、内部構造は粘土層からなり、内行花文鏡、石釧、鍬形石、管玉、鉄剣を副葬する前期の古墳である。^{註18}

飯岡には先の車塚の外に薬師山、ゴロゴロ山、弥陀山、トヅカの各古墳がある。特にトヅカは飯岡の東麓にあつて直径約22米の円墳で、内部構造は丸石積の竪穴式石室からなり、銘文を有す画像鏡2面、一神四獸鏡1面、玉類、刀剣、鉄地金銅張の鏡板、杏葉等の馬具類が発見されている。^{註19}

此の地域の代表的中期古墳は田辺町大住八王子の古墳群である。チコンシ山古墳は橿原考古学研究所の実測図によると前方後方墳と云う特殊な外形の古墳で注目すべきものである。^{註20}

後期古墳としては丘陵地の各所に存在するが、田辺町では西薪の天理山古墳群3基、掘切古墳群3基、小穴古墳群7基が一休寺裏山に集中する。もう一つの集中地域は三山木弥生式遺跡のある普賢寺谷で多々羅の下司古墳群5基、水取に2基、天王のシオ古墳と谷の南側に山崎神社の八王寺塚、権塚、菖蒲谷古墳がある。いずれも小型の横穴式石室で巨石墳と呼ばれる様なものは存在しない。^{註21}最も大きな横穴式石室は下司1号墳で、両袖式の石室は玄室の長さ7米、巾2米、羨道推定7米、巾1.8米の規模のものである。^{註22}

亦普賢寺谷の下司には白鳳創建の普賢寺址があり、三山木佐芽垣内には奈良期から平安期に続く三山木廃寺がある。亦田辺町興戸の京都府農業試験場より瓦や須恵器、土師器の出土をみる。^{註23}

以上概観した如く、三山木弥生式遺跡の周辺は縄文式時代より歴史時代に続く遺跡の濃厚に分布する地域であり、木津川の両岸は大和と山城更に木津川、淀川を徑て河内、摂津、瀬戸内海に通ずる古代交通路にあたる。特に三山木、飯岡、井手を結ぶ線は南山城平野の中央頸部を押える地域で我が国上代に於ては重要な地域であつたと思われる。^{註24}

註1 「京都府史蹟名勝天然記念物調査報告」第12冊 昭和6年

註2 同上

註3 「京都府史蹟名勝天然記念物調査報告」第4冊 大正12年

註4 「大阪府文化財分布図」1964 大阪府教育委員会

- 註5 遺跡の土地所有者藤林氏蔵
- 註6 栗野謙「京都府八幡町美濃山出土の甕棺」古代学研究第39号 1964年
- 註7 佐原真氏の分類形式による。
- 註8 栗野、山田の踏査による。
- 註9 「田辺町郷土史」古代篇 昭和34年
- 註10 栗野の踏査による。
- 註11 註9に同じ
- 註12 古代学研究会京都委員、星野猷二氏によつて採集されている。
- 註13 精華中学校蔵
- 註14 同志社大学にて調査
- 註15 梅原末治「椿井大塚山古墳」 昭和40年
- 註16 小林行雄「古墳の発生の歴史的意義」史林38/1 1954
- 註17 森浩一、石部正志「畿内およびその周辺」『日本の考古学』古墳時代上 昭和41年
- 註18 京都府史蹟勝地調査会報告 第2冊 大正9年
- 註19 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第21冊 昭和30年
- 註20 註19に同じ
- 註21 梅原末治「大住村車塚」京都府史蹟勝地調査会報告 第3冊 大正11年
- 註22 西田直二郎「大住村史」
- 註23 「田辺町郷土史」古代篇 昭和34年
- 註24 埋蔵文化財発掘調査概報 1964 京都府教育委員会
- 註25 註23に同じ
- 註26 京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第11冊 昭和5年
- 註27 京都府史蹟勝地調査会報告 第4冊 大正12年

第2章 調査経過と日誌

今回調査された遺跡は、近畿日本鉄道株式会社の近鉄筒城ヶ丘住宅地として大日本土木によって施工されている建設区域の中にあり、調査は建設作業進行中に行なわれた。

遺跡地域は田辺町郷土史会によって発見され、天神山弥生式遺跡として『田辺町郷土史—古代篇』に記載されていた。亦京都府教育委員会の『遺跡目録—1961』及び文化財保護委員会の『全国遺跡地図—京都府』にも遺跡番号684として記されている。此の遺跡が今回の建設予定地域内に入るかどうか買収交渉の段階では関知することは出来なかった。然し隣接地の工事に関しては弥生式遺跡の性質上外観からは不明確であり、広範囲にまたがると思われ、田辺町文化財保護委員会は埋蔵文化財保護の上から工事の着工と同時にパトロールを続けて来た。

昭和41年5月に入り、工事は丘陵地を切通し道路がつけられた。その際、丘陵北東斜面に於て

弥生式土器片ではないかと思われる土器片がブルドーザーによって掘起されているのを発見した。田辺町郷土史会員は田辺町文化財保護委員会を通じて京都府教育委員会文化財保護課に係員の派遣を要請した。

その間工事は着々と進行し、第1期工事は完了してしまつた。2ヶ月を経過しても京都府教育委員会文化財保護課からは何の連絡も無いので、田辺町文化財保護委員会は地元の田辺中学校教諭栗野謙に連絡をとり査察を依頼した。栗野のもとにはたまたま工事現場の掘起された崖の表面より、中学生が土器片を採集して来ていた。

栗野は工事担当者である大日本土木田辺事務所にその地点の工事関係を問合せたら、8月末から9月には第2期工事に伴い採土と共に削平されることがわかつた。田辺町文化財保護委員会は工事に伴って埋蔵文化財が消滅することのないよう、遺跡の確認のため予察調査を栗野、山田に依頼した。

栗野と山田は工事担当者である大日本土木の工事事務所におもむき、調査の主旨を伝え了解を得た。

現場におもむき、土器片を採集したという地域を表面から観察した限りでは土器片の一片すら見当らなかつた。本当に土器の散布地があつたのか、或は工事のためにすでに消滅してしまつたのか非常に疑問であつた。

そこで7月23日念のため遺跡があるかどうか、切取られた崖にそつて巾1.5米、長さ約4米の区域を夏草の茂る表土をはいで査察することにした。その結果、北東部で弥生式土器片が検出された。此の地点を確認すれば単なる土器散布地であるか、或は従来知られている南斜面の弥生式遺跡との関連性が確認出来、今後の保護対策がたつかも知れないという見解にたつて、最小限の範囲で試掘を行なつた。

可能性の不明な仕事であり、無一文の発掘経費、人手不足と7月下旬の酷暑の最中の作業と悪条件の中で発掘を続けた。7月25日になつて弥生式土器包含層に落込みがあることを確認した。此の落込みの層は住居址の一部ではないかと思われるので、遺跡の重要さを認識し、田辺町文化財保護委員会は京都府教育委員会文化財保護課に連絡をとり指示を仰いだ。

京都府教育委員会文化財保護課は文化財保護法にもとづく発掘届を出すよう指示したので、関係書類を取揃えて提出するようとりはからつた。

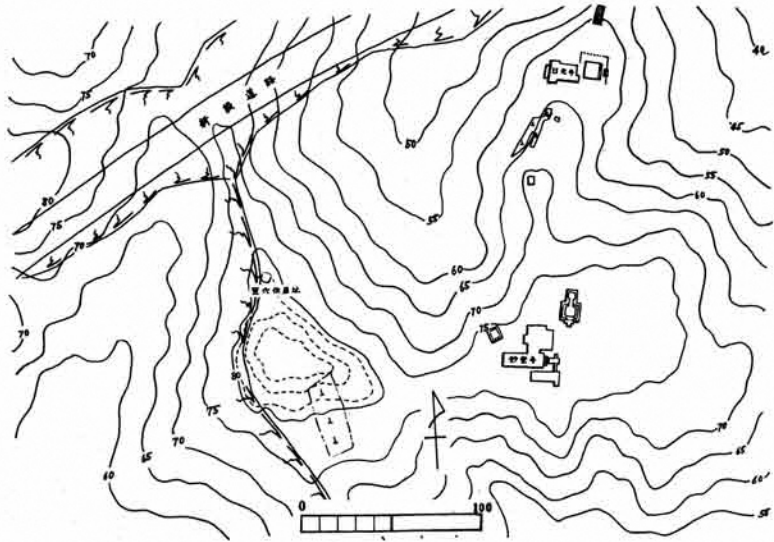
田辺町文化財保護委員会にて関係書類を取揃えている間に、栗野と山田は遺跡の存在が判明した以上初期の目的は達したので、作業を中止しようと思つたが、此の落込みが竪穴住居址であるのか、或は専門家には遺跡とはわかつてても工事関係者や地元の人々には一見して遺跡と理解し難いと思われるので、不完全ながらも住居址1基の範囲は完掘しておく事が今後の保護対策上有利と思ひ作業は続行した。

かくて弥生式時代の竪穴住居址1基を検出した。従つて実際に試掘した面積は約40平方メートルの小範囲で作業は7月29日に一応終了した。

7月29日に京都府教育委員会より「遺跡の発掘届」「遺物発見届」「遺物保管証」の3枚の用紙が送付されて来たので、工事に伴う緊急予察調査であるから此等の書類でよいと思ひ、京都府教

育委員会と京都府田辺警察署へそれぞれ提出した。しかるに京都府教育委員会より「発掘予定地所有者の発掘承諾書」その他の不備な書類を提出せよとの事であった。

「発掘承諾書」は建設工事担当者である大日本土木株式会社に



第2図 遺跡周辺図

土地の占有権があると思ひ、承諾を受けに行ったら、土地所有者は近畿日本鉄道株式会社であるからそちらに行つて欲しいとの事で、近鉄本社におもむき、その間の事情を説明し、手続きが遅れているから「発掘承諾書」が欲しい旨を伝えた。事情はよくわかるが近鉄としては、宅地造成は資本と時間をかけて行なっている事業であり、造成地は一種の商品でもある。目下その地域は売買契約成立途上にあつて、そこに重要な遺跡があることが明確になれば売る方も売り難く、買う方も買い難い。従つて商品に傷がつくことで「発掘承諾」は認め難いとの事であった。

そこで度々足を運び、関係者の意向を調整した結果、8月末までには「土地所有者の発掘承諾書」を田辺町文化財保護委員会に送付する約束が成立した。

8月下旬に京都府教育委員会文化財保護課は本調査に対して、「文化財保護法第57条による発掘調査届出が行なわれていない不法な調査であり、文化財保護法を尊重して調査するよう」との警告文が田辺町文化財保護委員会と発掘担当者あてに来た。

田辺町文化財保護委員会と発掘担当者は連名の上で、上述の如き「京都府綴喜郡田辺町三山木天神山にて発見された遺跡の件について、発見届等に関する事実の顛末」と「発掘調査概要」を8月27日付で京都府教育委員会文化財保護課に提出し、今後の遺跡の保護対策を要望した。

その後、此の遺跡に対し如何なる保護処置がとられたかは知らない。亦找々に行なわれた警告と同様に近畿日本鉄道株式会社、大日本土木株式会社にも行なわれてしかるべきと思うがそれも聞いていない。「土地所有者の発掘承諾書」がとれたのは「高城ヶ丘住宅地」が同志社大学に売れてからの事である。亦本遺跡は同志社大学校地の中で現状のまま保存されることになった。これは京都府教育委員会文化財保護課によって保存されたのではなく、同志社大学理事の方々の文化財に対する深い御理解と同志社大学助教授森浩一氏の御尽力によるものであつて、本遺跡を最初に担当した者一同は深く敬意を表す次第である。



第 3 図 遺跡より平野眺望

調査日誌

7月23日

近鉄興戸駅に9時全員集合する。現場に向い工事現場事務所に挨拶し、土器を採集したと称す付近に到着する。田辺町郷土史会員村井博氏が三山木小学校よりテントを借りて来て下さった。

土器を採集した付近の現場はかなり変貌していたらしい。表面より観察した限りでは土器の一片すら見出すことは出来なかった。亦道路のため切取られた崖の断面にもそれらしい包含層は見当らなかった。

表面から観察する限りでは土器の散布地であるか、はなはだ疑問であり、中学生等が土器片を発見した地域はすでにブルドーザーに削られて無くなっているのであろうと思われた。然し近き将来採土のため消滅する地域であるから、可能性の少ない所だが念のため夏草の茂る表土をはいで査察することにした。

切取られた崖に沿って巾1.5米、長さ2米のトレンチを2つを設定、南北2区に分けて表土をはぎにかかった。

南区は約20種の厚さの表土の下に黄褐色の粘土質土層があり、多少の凹凸はあるが土器その他の遺物及び遺構らしきものはなく、初日で放棄した。

北区は表土下約20種で平面的には黒褐色土層と黄褐色土層に分れており、黄褐色土層は南区同様無遺物層であった。一方黒褐色土層の中には弥生式土器片が混入していることがわかったので、此の黒褐色土の分布範囲を追及するためトレンチを拡張した。

7月24日

昨日に続いて黒褐色土の平面的分布範囲を追及する。このためトレンチを拡張した北区に巾約50種の細いトレンチを東西、南北に十字状に入れ、その断面を観察し、壁面の実測図をとる。その結果、表土の下に層の厚さ約60種の黒褐色土層があり、此の第Ⅱ層は土器の包含層でもある。その下第Ⅲ層は南区の第Ⅱ層と同じ黄褐色粘土質の無遺物層をなしていた。北区南北のトレンチの断面図を見ると、北区第Ⅱ層の黒褐色土は南端から急に約50種落込み、中央部で約60種の層厚をなし、底辺はほぼ水平をなしており、北端でゆるやかに再び上昇する断面をなしていた。東西断面は南北断面ほどはっきりした落込みを示していない。即ち両端で僅かに10種位落込み、第Ⅱ層底辺は殆んど水平であった。

竪穴住居址の可能性はあるがこれを決める確証はないので、平面的に分布する黒褐色土を黄褐色土に沿って取除く作業を進めていった。

7月25日

黒褐色土を掘下げる。南端の落込み部分がかかなり明瞭になり、直線で黒褐色土と黄褐色土が分かれる。これより一辺約6米の方形プランの住居址になって行くように受取れた。

昼頃、田辺町郷土史会員の村井博氏がみえたので、遺跡としての可能性が強いから田辺町文化財保護委員会を通じて京都府教育委員会文化財保護課に連絡をとってもらおうよう依頼した。

黒褐色土層に埋没している土器は保存状態が悪く、出土状態の写真は撮影出来ても、すでにヒビ割れがあり、取上げることも困難なものが多かった。

トレンチ南西部でサヌカイト製石鉢1個、器形不明の棒状鉄片1個が弥生式土器包含層から出土したが、この鉄片は器形も不明で本当に弥生式時代の遺物か疑問であったが弥生式土器以外混入した遺物もなく同時期のものと思う。亦磨面を有す砥石も出土した。

7月26日

作業の進行に伴い、竪穴住居址のプランがかかなり明らかになって来る。南壁はかかなり明瞭であるが、東壁は北に行くに従って壁の傾斜が次第にゆるやかになり北東コーナーは不明確である。西壁も東壁とはほぼ同様で北西部がはっきりしなくなっている。

竪穴東壁内側で、東南隅より約2.6米の処で径約30釐、深さ20釐の柱穴1個が検出された。昼休みに村井博氏がみえ、京都府教育委員会文化財保護課の指示によると、文化財保護法にもとづく発掘届を提出せよとの事で、その手続をとることにした。



第4図 弥生式土器出土状況

竪穴内の床面の清掃にかゝる、南西隅の壁内側に巾20釐の細い溝状の遺構があることがわかり、これを追求する。

一方中央部や東寄りに木炭粒の混入する凹地があり、落込んでいる土器底部は焼けたとれたものがあり、炉址と考えられた。此の炉址の検出を行なう。

床面の清掃中、炉址の北西辺で、床面に接して異形銅器1個が斜めに立った状態で出土した。此の銅器の周辺には目立った特別の遺構は何ら存在しなかった。



第5図 鉄製刀子(矢印)出土状況

銅器の保存状態は悪く、縁には細かいヒビ割れがあり、取上げに苦労した。

新聞各社の記者が記事の取材に来場、明日新聞発表して欲しいとの申し入れを受けた。

7月27日

異例の特殊な青銅器である旨を新聞各社に発表し作業現場に急行する。

昨日に引続き床面の清掃作業を続行する。床面は黄褐色の粘土質土であるが部分的には此の下2～3層の処に薄い黒褐色土があり、更にその下にも黄褐色粘土質層がある。床面がどの粘土層になるか迷う、特に北西部がはっきりしなかった、多分床面に数層の粘土を張ったものと観察した。

南東隅の南壁の下で砥石が出土し、更に土器と共に鉄製刀子一口が刃を竪穴内部に向け、切先を東にして殆んど床直上で出土した。

終日かゝり竪穴内の清掃をする。竪穴の北半分はやゝゆるやかに上昇するが、竪穴住居地の北壁は検出出来なかった。結局この竪穴住居地は緩傾斜地を切り取り、床面を水平にした方形プランの竪穴住居地と観察される。

7月28日

テントを撤去し、遺跡全景、竪穴全景及び竪穴の部分を写真撮影する。写真撮影後、竪穴住居地の平面図と断面図を $\frac{1}{20}$ のスケールで実測した。

調査期間中一滴の雨も降らず快晴に恵まれた。丘陵上の高乾地であるため、黄褐色の粘土質土は非常に乾燥して堅くなり、他の柱穴の検出や南西隅内側の溝は時間が経過するにつれてその検出は困難であった。調査の初期の目的が予察のための試掘であれば、弥生式住居地一基が確認されたことは予期以上の目的を達した訳であり、竪穴内の柱穴や竪穴周辺の外郭施設の調査は後日再調査することにして、一応今回の発掘作業を終ることとした。

7月29日

出土遺物と調査道具の搬出準備をする。午後、古代学研究会の宇佐晋一氏の紹介で、国立奈良文化財研究所の佐原真氏、工業普通氏に来場を願い、今後の調査法と本遺跡出土の青銅器の復原、保存法の指導を受けた。

7月30日

大日本土木の現場事務所に預けていた出土遺物と調査用道具をトラックで搬出し、城南高等学校に持帰り、地理準備室に格納保管した。

調査組織

調査主体	京都府田辺町文化財保護委員会委員長	村田 太平
発掘担当者	京都府立城南高等学校教諭	山田 良三
調査員	京都府田辺町立田辺中学校教諭	栗野 謙
	竜谷大学史学部学生	平良 泰久
	城南高等学校地歴部	岩見 繁 奥村多樹雄 堀口常次
	今崎和孝 加藤哲男 中島寿一 服部和一 森西俊夫 吉水 保	
	田辺中学校郷土調査部員	敦名

本遺跡の調査に際し、諸道具の搬入、搬出から諸種の届出及び手続きのため、各所に奔走していただき、尚本報告書の刊行にまで御尽力を給った田辺町郷土史会の村田太平、村井博両氏に対し厚く感謝の意を表します。

青銅器の補修復原等に対して、古代学研究会の宇佐晋一氏の御紹介で国立奈良文化財研究所の佐原真、工業善通両氏に多大の御足労をわずらわした。記して謝意を表する次第である。

第 3 章 堅穴式住居址

調査以前の遺跡地域の地形は南北約100米、東西約80米の平坦な台地状の丘陵末端をなし、比高35～40米の急傾斜面をなして平野に移行する。今回発見の堅穴式住居址は堅穴の北10数米先で急傾斜の丘陵斜面に移行すると云った位置に立地していた。

堅穴式住居址付近の地表は堅穴の南端と北端では北側が約50程低くなる緩傾斜面をなしている。堅穴住居址は傾斜地を利用しているため、堅穴の南半部を切取って掘りくぼめ、北半分は元の地表面をそのままならして床面となしていたと思われ、堅穴の南壁は高さ40程の明瞭な壁面があるが、北壁は認めることが出来なかった。即ちこれは雨水の浸蝕により北壁が流失したのではなく始めから存在しなかったのである。

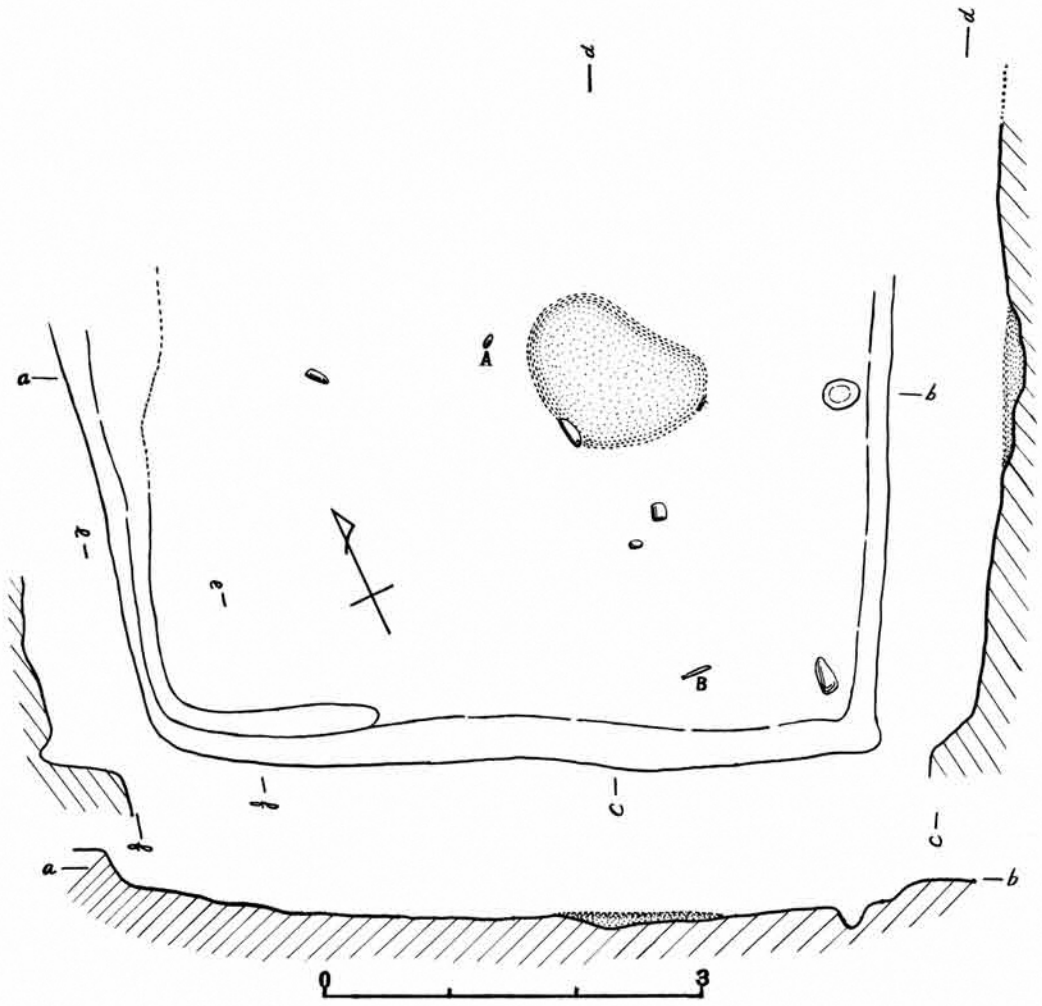
従って堅穴の規模は東西径の大きさはわかるが、南北の厳密な大きさは明らかにすることは出来なかった。検出出来た範囲では方形プランの堅穴式住居址で、規模は東西径即ち南辺で5.8米あり、南北径は不明であるが、堅穴の中央よりやや東壁寄りに炉址と柱穴が存在する。此の柱穴と炉址を結ぶ線が方形プランの南北径のセンターラインと推定すると、南東角から柱穴までの長さが2.9米であるからその2倍の長さと考えて、東辺の長さは5.8米と推定される。

炉址は東壁より2.2米の処にあつて、堅穴の中央よりやや東寄りに存在した。炉址の大きさは東西径1.4米、南北径1.1米の楕円形に近い形で、周囲には何の施設もない深さ20程の凹地をなすものである。此の凹地より木炭の細粒や焼けた土器底部等が出土し、凹地底部面は焼けていた。尚炉址周辺からは砥石が多く出土したことが目立った。

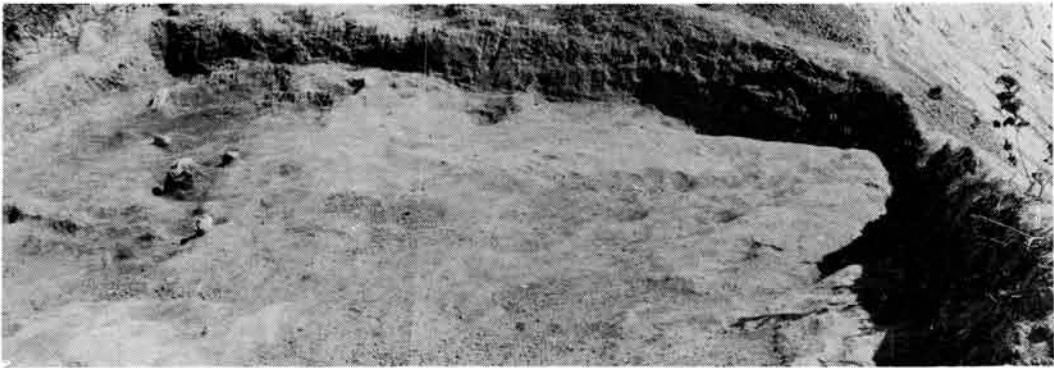
柱穴は炉址の東側、堅穴東壁より25程内側に、黄褐色粘土層に径30程、深さ23程のものが1ヶ所検出された。此の柱穴も特別な施設は存在しなかった。その他の柱穴は残念ながら明らかにすることは出来なかった。

堅穴の四隅は厳密な直角をなさずやや隅丸の角をなすものである。亦西南隅の南壁直下に長さ1.7米、西壁直下では1.6米にわたり、巾18程、深さ10程の細い溝がL字状に存在した。此の溝は堅穴内の漏水を排水するための施設と推定する。

堅穴床面は黄褐色粘土質土をなす、然し北西部に於ては2～3程の黄褐色粘土質土層の下に1～2程の薄い黒褐色土の無遺物層があり、その下は再び黄褐色粘土に砂礫が混入する地山となっている。此の黒褐色土層は緩傾斜した住居址前の地表面で、堅穴床面を築成する際に低い方の地山の上に黄褐色粘土を数纏敷きつめて張り床にして堅穴床面にしたものと考えられる。



第6図 竪穴式住居址実測図
A 異形青銅器 B 鐵製刀子



第7図 竪穴式住居址南半部

竪穴内の出土遺物で土器は一般に南半部地区で出土した。特に炉址付近と東南部、西南部付近に多く集中していた。砥石も炉址付近から東南部にかけて多く出土した。

異形銅器は炉址北西辺で、鉄製刀子は南東部の南壁直下で出土しており、これらは殆んど床面に接して出土している。

山城の弥生式遺跡で竪穴式住居址が確実に検出された例はない。本遺跡に最も近い竪穴式住居址の例は枚方市田ノ口山遺跡^{註1}、同市藤坂ごんぼ山遺跡^{註2}がある。「ごんぼ山」は弥生式後期の遺跡で一群の住居址があったが、完掘された竪穴式住居址一基は一辺6米の方形プランの竪穴式住居址で、中央に炉址があり、柱穴は方形の四隅にあった。床面は僅かに傾斜し、傾斜に沿って竪穴壁の直下に細い溝があり排水の施設があった。此の「ごんぼ山」の竪穴式住居址に三山木弥生式遺跡の竪穴は近似している。

異形銅器や鉄製刀子と云った特殊な遺物を出土しているが、住居址そのものは弥生式後期に見られる普遍的な竪穴式住居址である。

註1 片山長三「枚方台地の先史遺跡」畿内歴史地理研究 昭和33年

註2 昭和38年、枚方既制服工業団地の造成工事に伴つて斉藤和夫、山田良三及び関西文化財保存協議会有志によつて遺跡を確認し、緊急調査として竪穴式住居址1基が発掘調査された。報告書は未刊行である。

第4章 遺物

(イ) 弥生式土器

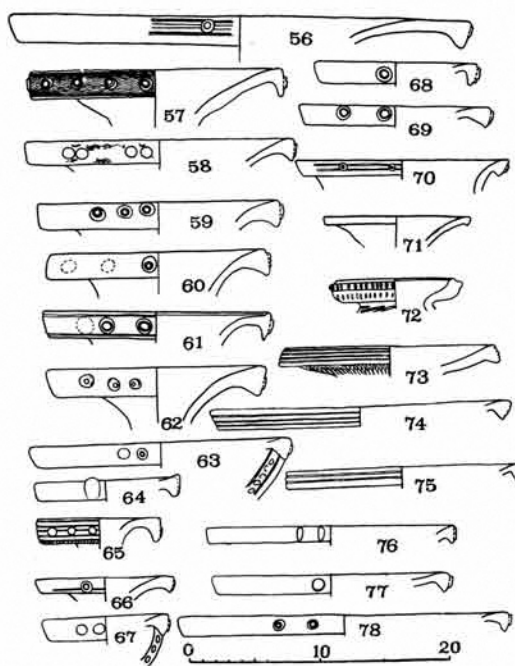
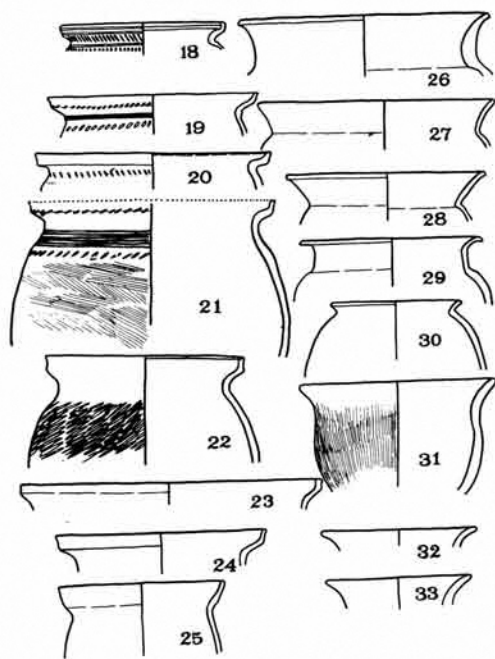
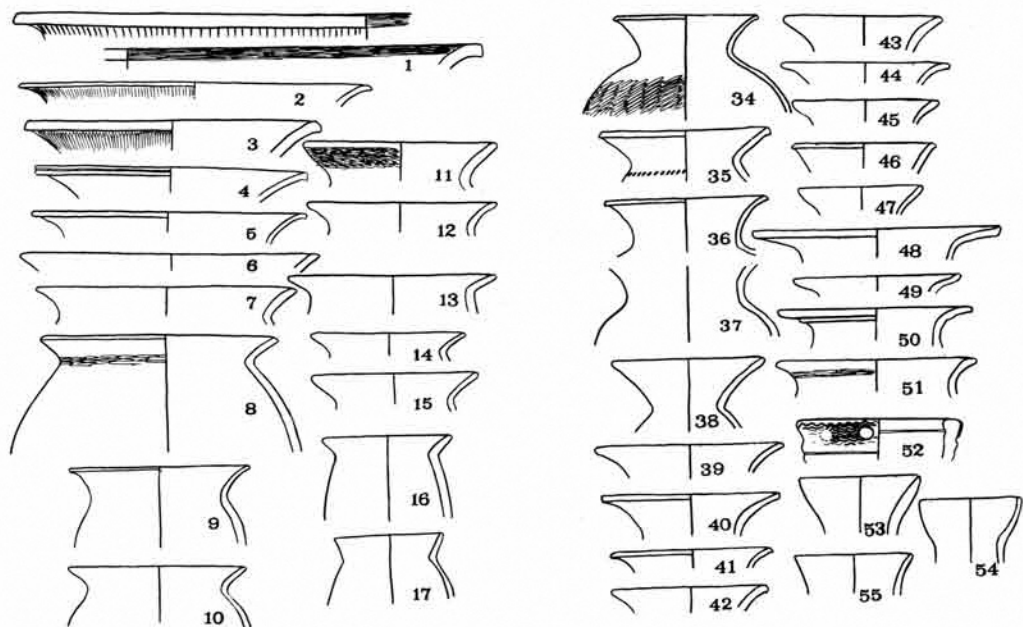
甕形土器

「く」字形に強くひらいた口縁部をつけた甕で、口縁部は器壁の厚さのまゝひらたく仕上げられている。口唇部は面をとつたものとそのままのものがあり、4は沈線1本が施されている。亦篋磨による仕上げや櫛目による仕上げのものもみられる。1は口径55種の大型甕の口縁部である。胴部は8から推察するに丸味をおびた無花果形をなし、壺形土器と大差ない器形をなすと思われる。9～11は8型の小型の器形であろう。

12～17は胴部或は底部を失うものであるがいずれも小型甕形土器である。16、17の器形より胴部は細長い器形と思われる。

18～25は頸部より強く開いて直口する短いつまった口縁部をなすもので、口縁に沈線を頸部に突線の装飾を施し、口唇は内に肥厚されている18の様なものや、19～21の如く口縁部や頸部に刻目や櫛描横線の装飾が用いられている。胴部は21の様な丸味を帯びた無花果形をなすと思われ、櫛の叩目や刷毛目による仕上げがなされている。24、25は小型であるがやゝ胴長の器形と思われるものである。

26～29は短い直立する口縁部であるがやゝ外開きになるが1～17のグループとは異なる一群である。中でも29は特徴的口縁部をなす器形である。



第 8 图 弥生式土器実测图

30は短い外開きの口縁部がつくものでむしろ無頸壺形土器の部類に属すものかも知れない。然し此の時期の土器の器形は甕形、壺形に厳密に分類することは出来ないのでここに記載した。

鉢形土器

31～33は底部或は胴部を欠失するものである。やゝ丸味を帯びた胴部の器壁の厚さのまゝ口縁部は外開きになる。器形は完全な鉢形より甕形に近いもので、刷毛目による仕上げがなされ、表面には煤が付着している。32、33は小型甕形土器になるか、31型になるか不明であるが口縁部の形態は31に近いものである。

壺形土器

頸部でしまり「く」字形に開く口縁部で器壁から同じ厚さで口縁部がつくれ、口唇に面をとったものとなないものがある。34には櫛の叩目がみられ、35は頸部に刺突文の装飾が施されている。38～47は小型の壺形土器の口縁部と思われる。

48～50は口唇部は直角に近く外開きになるもので、頸部以下を欠失しているので或は甕形の器形をなすものかも知れない。

52は異形土器の口縁部で直立し、内側に肥厚された口唇をなし、外面には櫛による波状文を施した上に円形浮文を貼るものである。

53～55はやゝ外開きの直立する口縁部で、小型の壺形土器であり、長頸壺系の器形と思われる。

56～106は頸部から大きく外に開き、口唇は下に折曲るか、肥厚され、幅広い縁をなす広口の壺形土器である。56、79の口径35種の大型のものから、65、71、95の10種前後の小型のものまである。口唇部には櫛描による沈線文、波状文を施し、その上に竹管の円形浮文を貼けたもの(50～70、76～78)が見られる。73～75は櫛描の沈線文のみの装飾が施され、篋磨きによる仕上げがなされている。63、67、81は口唇部裏に沈線や棒端による圧痕がみられるが製作上の痕跡であろう。79～106は無装飾の一群である。

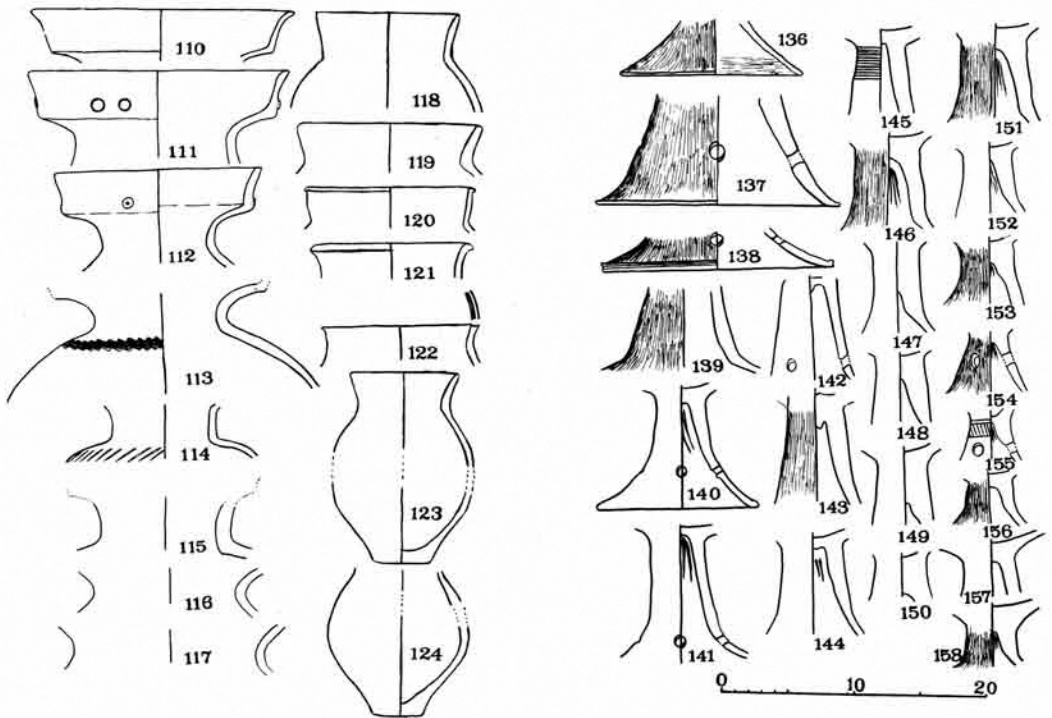
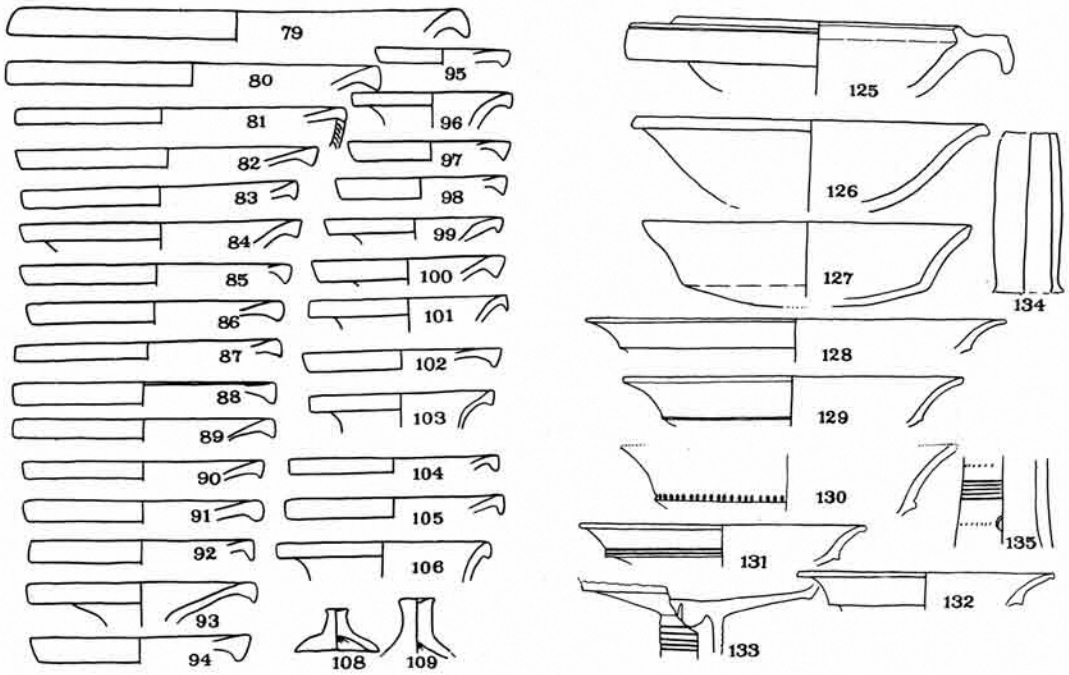
72は非常に特殊な口縁部で頸には沈線を施し、口縁部内側に合口用の縁がつくられており、外面は刻目、刺突文の装飾がなされている。合口用の縁の存在はこれに合う蓋の存在の可能性がある。108、109は蓋形土器であるがこの形のものが72の口縁部の上に乗るものかは疑問である。亦72の土器はその器形からして、恐らく末永雅雄博士が指摘しておられるような木製容器の形態を土器に模倣したものであろう。^{註1}

110～113は頸部でくびれ外開になり再びやゝ外開の直口した口縁をなす壺形土器で、口縁部外側には円形浮文の貼付けによる装飾がみられ、肩部に櫛描きによる波状文や叩目による仕上げがみられる。胴部を欠失しているが113より推して無花果形の器形になるだろうと思われる。

118～123は短い口頸部がつく短頸壺形土器で、口縁部は僅かに開いたものと、122の様に直口のものがある。胴部から底部は123、124になるであろう。篋磨きの仕上げで文様はない。

高杯形土器

125は厚手の杯で口唇は下に折曲り、沈線1本の装飾が施され、口縁部の内側に内彎する突起状の縁がつき、篋磨きの仕上げがなされている。此の土器も末永雅雄博士の指摘されている木製容^{註2}



第9图 弥生式土器实测图

器の土器化されたものであり、器形から察すると合口の蓋が推察される。

126、127も共に高杯形土器の杯の部分で共に篋磨の仕上げがなされている。脚部は欠失しているが134の様な高い筒状の脚部がつくと考えられる。

128～133は平らな杯に外開きの巾広い口縁部を持つ高杯で、曲折部には稜を持ち突線や沈線或は130の様な刻目を有すものもあり、いずれも篋磨の仕上げが行なわれている。脚部は133の様な櫛目の沈線文や135の様な刺突文と櫛目との組合せの装飾や有孔が存在していたと思われる。

136～184はいずれも高杯の脚部で、必ずしも133型の杯がつくものとは限らない。発掘の過程に於ては比較的小型のゆるやかなカーブの126型の杯がつくものが見られた。亦これらの脚部は高杯のものばかりでなく163の様な台付壺の底部も混入していると思うが、胴、杯部が欠失しているのでこゝに仕上げた。亦これらの脚部には有孔のものと無孔のものがあり、有孔も4孔と3孔の二種があった。篋磨、刷毛目による仕上げや、櫛目の沈線や155の様な装飾が施されたものがある。

器台形土器

上下の両端が強く開いた円筒形で、上下に3ヶ所の円孔を有すものと、円孔のないものとの二種に分かれる。亦表面は篋削りによる仕上げのもの(226)(230)もある。中には233～238の様な高杯の脚を思わす小型のものもみられる。

甌形土器

完形品は皆無で底部だけであるが、214は無頸の鉢形の甌であろう。244は小形甌形の甌が考えられる。中には217、218の様な低い台付底部をなすものもある。205、207、218は櫛の叩目が施されている。底部の小円孔は比較的大きいものもみられる。

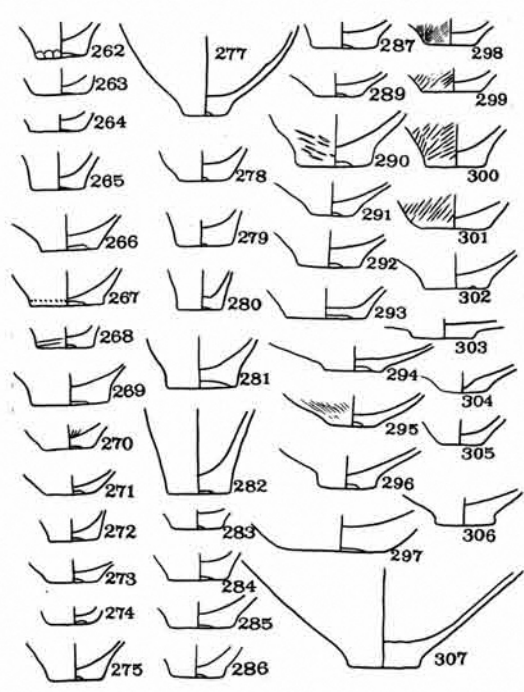
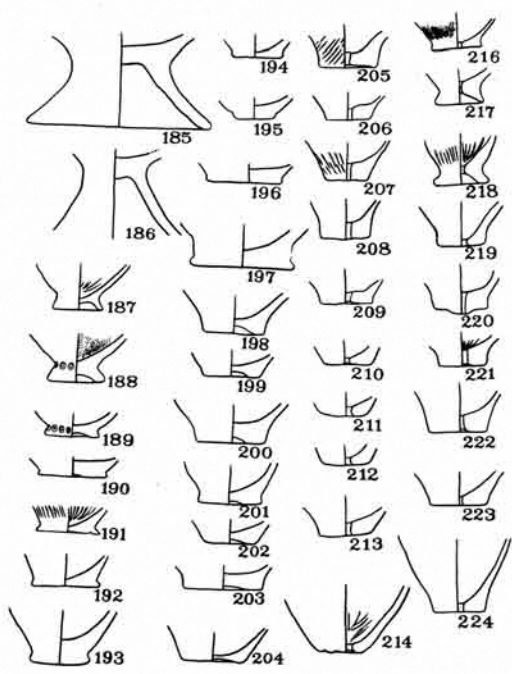
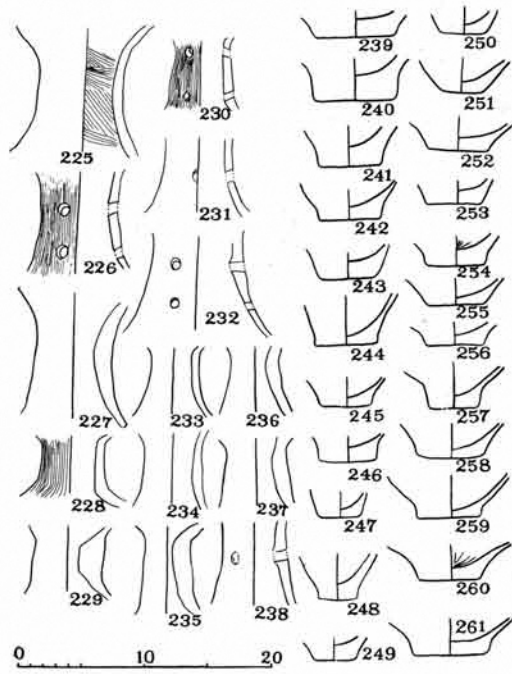
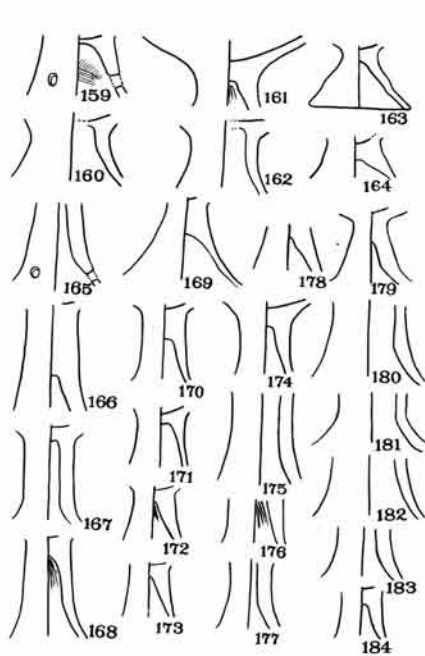
台付底部

底部だけであるが恐らく台付壺形土器と推察される。185はかなり大形の器形をなすであろう。163の様に器形の割に高いものから187～189の様に低い高台をなすものまである。188、189は高台のくびれ部に棒で突いた様な刺突文がみられる。これは装飾として施したものか或は製作上出来たものか疑問であるがこの様なものが存在する。

土器底部

各種の器形の底部で、どの底部が上述のどの器形になるか残念ながら不明であるが、平底のもの、中央部が僅かに上る上底や高台状に上る上底があり、中には丸底に近い厚手の297の様な底部もある。277や296は器形の割に小さい底部をなすものや294や303は胴部がかなり開く器形であろうと思われる。

以上はすべて住居址内出土の弥生式土器である。土器は総て茶褐色及び淡褐色に焼かれ、細砂をふくんだ緻密な土質の土器で、壺形土器の口縁部の円形浮文の貼付けや櫛目の横線、波状文、刺突文が口縁や肩部に見られる以外文様に乏しい。無文のものは篋磨仕上げを主とし一部には叩目、篋削、荒い刷毛目の仕上げをなすものがある。



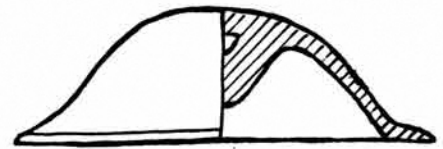
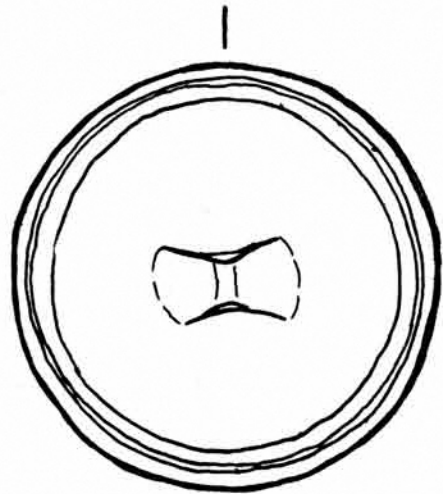
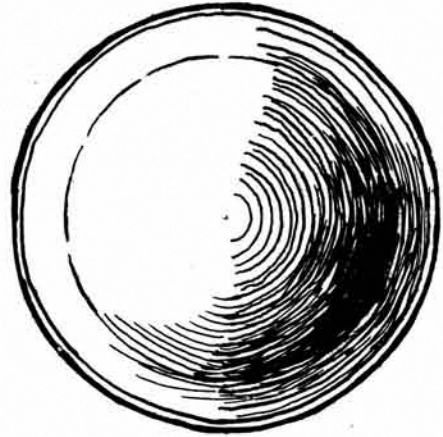
第10图 弥生式土器実测图

高乾地に埋藏されていたため風化が強く完形品は残念ながら1個も存在しなかった。土器表面に煤が付着するものがかなり目立っていた。

此の土器の一群は長頸壺形土器が見当たらないが、唐古第V様式の範疇にあって、西ノ辻I地点式に最も近似するもので比較的短期間に製作された一群の土器である。

註1、註2 末永雅雄「生活用具」日本考古学講座 4、昭和30年

註3 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡I地点の土器」弥生式土器集成 昭和33年



第11図 異形青銅器実測図

(口) 異形銅器

本遺跡出土の青銅器は直径5.6釐、高さ1.7釐の小型のもので、形態は半球形と云うよりはむしろ、山笠状に近い形に浅い鑄が付くものである。器厚は0.2釐中央部頂はやゝ厚くなって約0.3釐位である。裏面中央には角張った肉太のV字状の環状鈕がある。鑄状の縁の裏面には浅い一条の凹線が認められる。此の凹線以外は内外両面共に紋様等はまったく認め難い。色は青灰色でかなり酸化しており、質も脆い。保存状態は決して良好ではなかった。色、質共に古墳時代の青銅器に近い様に思われる。

環状鈕があり、大きさは弥生式時代の青銅器の一つである巴形銅器に類似するが、此の銅器はまったく無脚のものである。環状鈕があることは何かに着装する機能を有すもので、飾金具の一種と考えられる。

然し弥生式時代の青銅器は形態の上からのみ機能を推察することは出来ない。巴形銅器が形態上からは飾金具の一種と思われるが、北九州では甕棺の副葬品として複数で出土しており、単なる飾金具としての機能以外に別の性格を有す青銅器であったと推察する。従って此の異形青銅器も形態上からのみ、その機能や性格を判断することは出来ない。

尚此の青銅器に対する名称も未だかつて本邦で出土例のない遺物であれば、即断でもって名称を付す事が早計を免がれぬと思ひ、異形青銅器として記載する。

此の青銅器に形態上最も類似する遺物を強いて求むれば、楽浪古墓の遺物の中にこれを見ること

が出来る。此等の大陸の遺物に関しては後日稿を改めて考察してみたい。

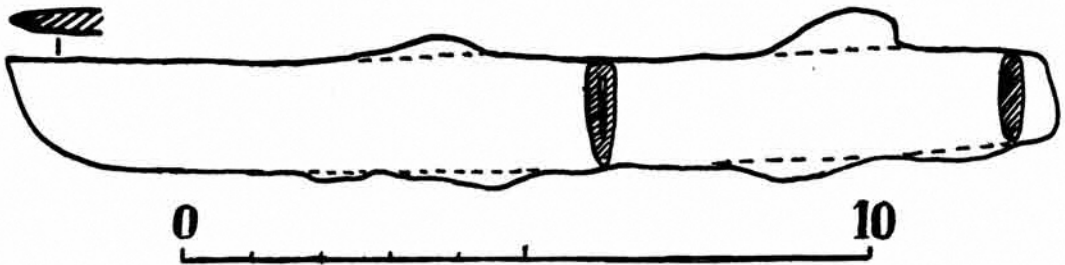
(イ) 鉄製刀子

長さ15.3釐、巾1.7釐、厚さ0.4釐の直刀状の刀子で、関から切先まで11.6釐あり、柄の部分の茎の巾1.2釐をなし、鈍い切先をなしている。折れ口の観察によると折曲げて造られた痕跡を残しており、鍛造のものである。

刀身以外の柄その他は何の痕跡も存在しなかったので、柄その他は不明である。

弥生式遺跡出土の刀子及び刀子柄は別表(1)の如く10数例が知られている。此等の資料の中で本遺跡は完形品であり弥生式時代の刀子の研究の好資料と云える。

註1 藤田等、田辺昭三「弥生時代鉄器鉄滓出土遺跡地名表」たたら研究4号、1960の抜萃に新資料その他を追加した。



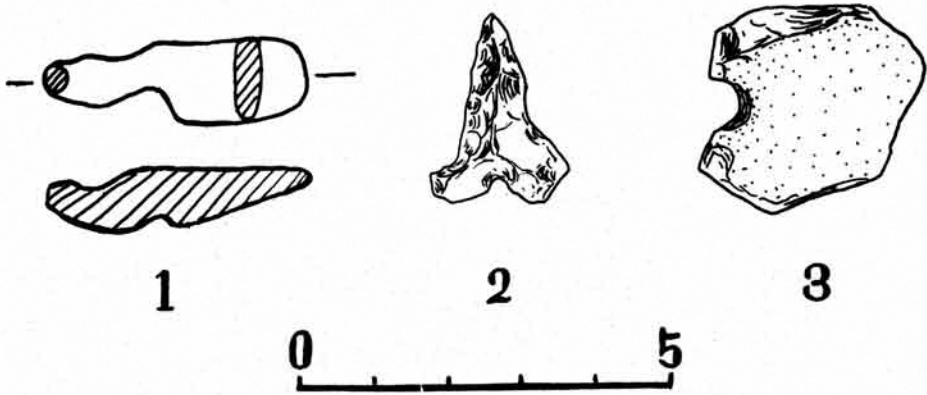
第12図 鉄製刀子実測図

別表1 弥生式時代の刀子関係出土遺跡地名表

番号	遺跡名	遺物名	時期	遺跡の種類	文献その他
1	東京都ケツケイ山	刀子	中期	住居址外遺物包含層	後藤守一ほか「伊豆諸島文化財総合調査報告」
2	新潟県矢代山	刀子	後期	第2号住居址	駒井和愛、吉田章一郎「斐太一新潟県新井市の弥生聚落址」1962
3	奈良県唐古	鹿角製刀子柄	前期	生活址	木永雅雄ほか「大和唐古弥生式遺跡の研究」京大考報16
4	大阪府天神山	刀子	後期	堅穴住居址床面	喜谷美宜「私たちの考古学」13
5	大阪府四ツ池	刀子	前期	土器包含層	森浩一氏調査
6	京都府三山木	刀子	後期	堅穴住居址床面	本遺跡
7	高知県奥名	刀子	後期	土器包含層	岡本健児「日本考古学年報」13
8	島根県多聞院	刀子	後期	貝塚出土層位不明	大谷從二ほか「貝塚」30号
9	山口県岡原	刀子状鉄器	終末期	第1号住居址同溝	小野忠熙「墨・漆を有する一古代村落址の研究」山口大記念論文集
10	福岡県須玖	刀子	中期	甕棺	考雑8ノ7 11ノ2
11	福岡県立岩	刀子2	?	甕棺	飯塚市立図書館蔵
12	福岡県立岩	刀子	中期以後	甕棺	児島隆人ほか「日本考古学協会昭和40年度大会発表要旨」
13	長崎県カラカミ	刀子、鹿角製柄	中・後期	集落址	岡崎敏「日本に於ける初期鉄製品の出現」考雑42ノ1
14	長崎県原ノ辻	刀子、鹿角製柄	中・後期		同上
15	長崎県佐護白岳	青銅製刀子柄	中期		東京大学人類学教室蔵
16	長崎県三根サカドウ	青銅製刀子柄	?	組合式石棺	対島遺跡調査会「長崎県対島調査報告(一)」考雑49ノ1

(二) 鉄器片

長さ3.5釐、巾1釐、厚さ0.4釐、但し一端は長径0.6釐、短径0.4釐の棒状をなすが、器形はまったく不明である。仮りに棒状の部分を茎の一部とすれば反対側に刃がつく鉄鏃か、工具類が考えられるが、これだけで器形を推察するのは無理である。他の金属器が竪穴の床面から出土したのに対し、此の鉄器片は竪穴内の黒褐色土の土器包含層から出土した。



第13図 鉄器片、石鏃、石庖丁実測図 1鉄器片 2石鏃 3石庖丁

(ホ) 石器類

石鏃1個

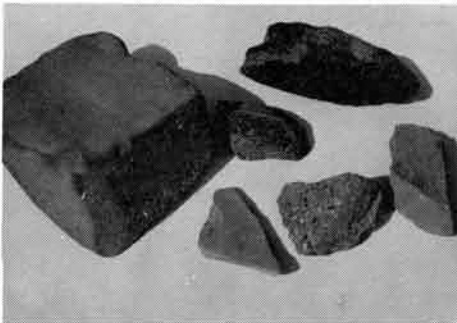
サヌカイト製で、二等辺三角形の底辺に契形の切込みのある形態の打製品である。黒褐色土の土器包含層から出土した。

石庖丁1個

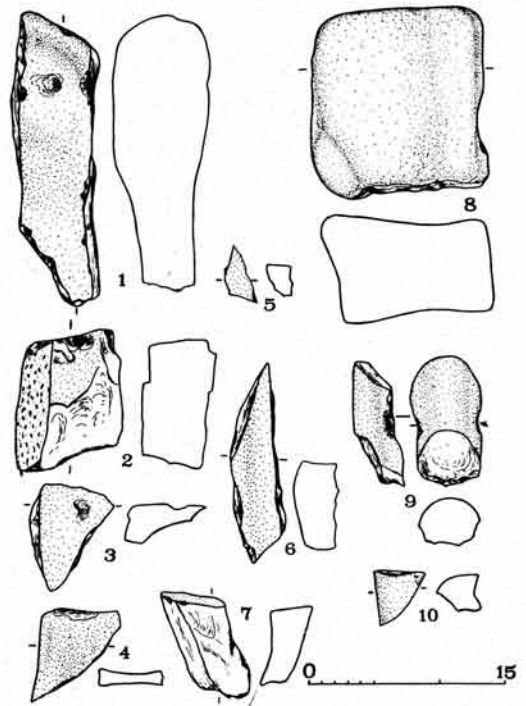
石庖丁の円孔部分の破片で、両面に磨面を持つ粘板岩質のものである。

砥石類10個

1は頁岩で表裏両面共によく研磨され、かなり



第15図 砥石



第14図 砥石実測図

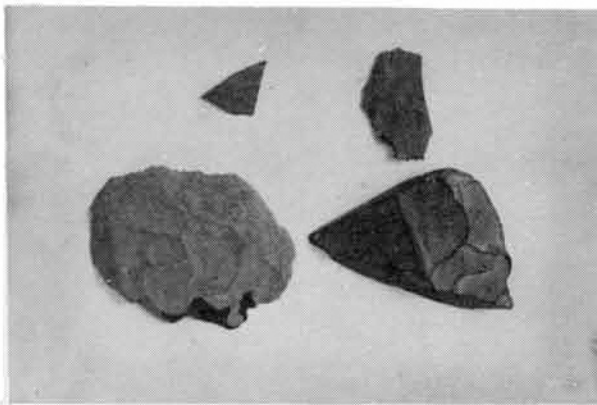
使用されたと見え、断面は石皿状に凹み薄くなった所で折れている。2、6、7は泥岩でそれぞれ割れているが、一面亦是二面にそれぞれ研磨された痕跡を持っている。8は堆積岩質のものでやはり一面に磨面を有す。その面に人工的にうがたれた凹みがある。此の様な痕跡は1にも見られる。4は砂岩で折れている面を除く各面とも研磨痕があり、よく使用されて薄くなり、中央は凹んでいる。8は砂岩で打撃によって割られた面以外の五面共によく研磨され、中央部は石皿状に凹んでいるものである。

此等の1～8の砥石は砂岩から泥岩と研磨の用途に応じて使い分けられていたと思われる。刀子の出土と共に考えあわせその感を一層強くする資料である。

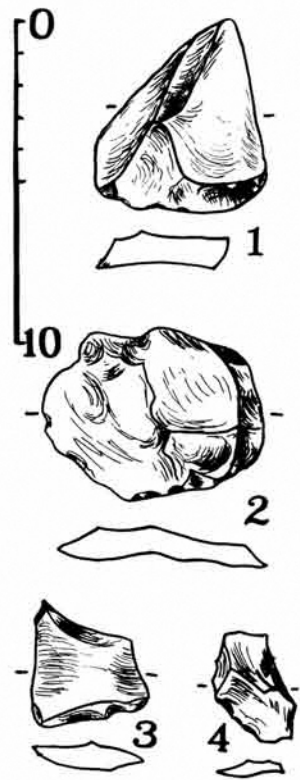
9、10は硬質の石質でいずれも破片であるが、研磨されており砥石の破片の様に見えるが、断面は円弧をなしており、或は磨製石斧の破片ではないかと思われる。但し9は両側に打製の凹みがあり、別の何かの機能を持つ石器かも知れない。破片であるため、石器の一部か砥石か断定は困難である。

サヌカイト剥片4点

4個のサヌカイト片とも人工的に剝離した面を持っている。2は一面に自然面を残している。サヌカイト製の石の出土と共に石鏃の製作、使用を裏付ける資料の一つと思う。



第16図 サヌカイト剥片



第17図 サヌカイト剥片実測図

第5章 総括

南山城は京都と奈良を結ぶ地域で古来重要な交通位置にあって各時代の遺跡が濃厚に分布している。今再び都市の膨張に伴いベッドタウンとして、都市化現象の著しい地域となり、そのために幾

多の遺跡が姿を消し、亦遺跡の破壊が進行している。本遺跡も今将に消滅せんとしていたが田辺町文化財保護委員会の緊急調査の結果、発見され保存された遺跡である。

竪穴式住居址一基と云う小規模な発掘調査でもって三山木弥生式遺跡全体を論じることは出来ないが、遺跡の保存処置をとられた同志社大学に対しても、亦山城で唯一の弥生式時代の竪穴住居址であり、特異な金属器を出土した遺跡として、発掘結果を研究者諸氏に速報することの重要性を考えて事実の報告のみを記し、不備な点は重々承知の上で此の冊子を刊行した。至らぬ点は御寛容をお願いしたい。

以下総括をかねて問題点をも提示しておこう。

1 三山木弥生式遺跡は平野からの比高約40米の丘陵端に立地する集落の中の住居址一基を調査したと推定する。丘陵端に立地する遺跡は生駒山地の北東斜面から男山に伸びる丘陵地帯に、第一章で述べたように多数存在している。

此等の遺跡はいずれも付近に谷水田に適した低湿地をひかえ、大阪湾沿岸の平野をかこむ六甲山地、生駒山地、紀伊水道にのぞむ山塊の山復や尾根上の高地性遺跡の軍事的性格の集落と区別し、弥生式時代の一般的なあり方の一つと考えられている。

註1

丘陵に刻まれる狭小な谷水田や水稻以外の畑作農耕と云った生産基盤が考えられるとしても、集落の立地条件である飲料水、水稻の有利な生産、交通等に恵まれているのは沖積平野である。沖積平野の中でも湿潤地でなくても、湧水線の発達する丘陵裾の傾斜変換線や自然堤防上の集落立地可能な所は三山木周辺には幾多存在する。此の様な自然環境の中でわざわざ高乾地の不便な丘陵端に立地するのは一般的な集落のあり方と片付けてしまえないのではなかろうか。そこには何等から当時の歴史的背景を考慮に入れなければならない。三山木弥生式遺跡は兩山城平野の中央部を見下す位置にあり、その感が一層深い。弥生式後期の丘陵地の集落の性格は今後更に追求しなければならない。

2 竪穴式住居址は一辺5.8米の四隅に若干丸味を持つ方形プランのもので、中央より片寄って炉址が存在する。此の形態の竪穴式住居址は弥生式後期に普遍的に見られる竪穴である。竪穴の壁面が南半部にあつて、北半部に存在しないのも、緩傾斜地を切取って床面にすると云った地形的制約から来たもので、特別な構造のものとは考えられない。

此の弥生後期の普遍的家屋構造の住居址から鉄製刀子や鉄器片と共に異形青銅器が出土している。仮りに鉄製品は木器の存在からかなり普及していたとしても、青銅器は壙棺の副葬品及び祭祀的遺物として特殊な性格を持っていたと思われる。しかるに本遺跡の場合は生活址より出土している。此の様な特殊な遺物を具備出来る身分の階級が恐らく発生していたと想像されるが、家屋構造からは明らかにすることが出来ない。三山木弥生式遺跡の全面発掘調査により集落の全貌が明らかにされた時、他の竪穴との比較によって集落に於ける位置や遺物との関係等の手掛が得られるのではないかと思う。

3 弥生式土器は総て竪穴内からの出土で、本遺跡に於ける炊事、貯蔵容器のセット関係を知ることが出来る。長頸壺形土器が無いが壺形土器の口縁部に円形浮文の貼付や櫛目の横線や波状文、刺突文が一部に見られる以外文様に乏しい土器の一群で、西ノ辻I地点に近似する唐古第V様式の時

期に属すものである。

72の長頸形口縁部の土器と125の高杯形土器は木製容器の形態を土器に模した好資料であり、逆に木製容器が生活分野にかなり浸透していたことを物語る。木器の発達には金属利器の普及と平行しており、鉄製刀子や鉄器片の出土と一脈通ずるものがある。亦、反面に於て金属利器の能力の優秀性は当時貴重視されたであろう。かゝる利器で製作され、耐久力は土器にまさる木製容器はこれ亦貴重視されたであろう。従って土器が木器を模倣すると云う現象が生じたのであろうと思う。

4 三山木出土の異形青銅器に弥生式時代の青銅器の中で最も形態的に近いのは巴形銅器である。三山木出土の異形青銅器は無脚の巴形銅器とも見られるが、巴形銅器が水字貝の銅器化したものであれば無脚の巴形銅器とは考えられない。従って三山木の青銅器と巴形銅器との関係の上で^{註2}巴形銅器の祖形に関して、再度問題を整理して見る必要を感じる。

亦形態的に類似せるものは楽浪古墓の副葬品の中に見られる。此の副葬品との関係、伝播等の問題は今後解決しなければならない。

弥生式時代の青銅器が墳墓の副葬品又は祭祀遺物的出土状態に対して、三山木の異形青銅器は竪穴式住居址より出土している。墳墓としての疑問は残るが、発掘の過程にあつてはその様な遺構はまったく認められなかった。従って生活址の遺物であり、遺物自身によって青銅器の機能即ち性格が異なるのか、或は地域文化によって青銅器に対する観念の相違があるのか、三山木出土の一個の異形青銅器をもって総てを律すことは出来ない。

5 三山木弥生式遺跡出土の刀子は鉄器片や木製容器の土器化する遺物と共に此の時期には金属利器がかなり普及したことを示している。然し本邦に於ける弥生式遺跡の刀子関係出土例は上述の別表の通り17例に過ぎない。住居址出土例は数少なく、完形品となると更に数少なくなる。

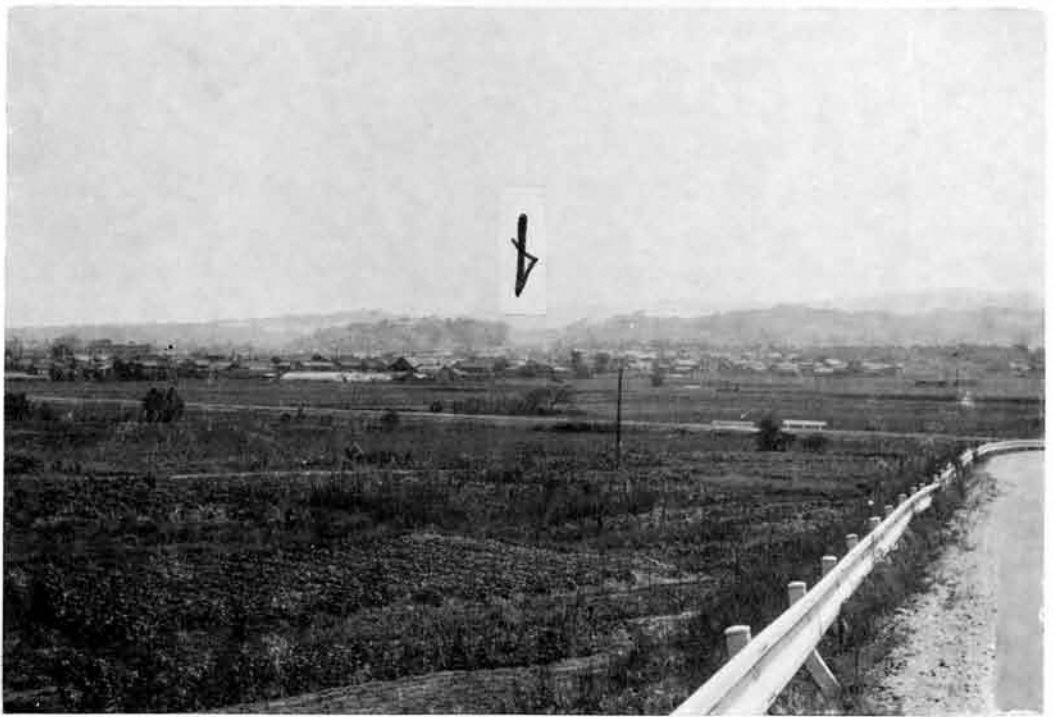
長崎県原ノ辻出土の刀子が刀身に比して幅広く、三山木の刀子とかなり形態的に相違があるのに対して、長崎県カラカミ、島根県多聞院出土の刀子の幅に近くなる。しかし両遺跡出土のものは完形品でなく、長さは不明である。亦両遺跡の刀子は鹿角柄が着装されており、特に多聞院の鹿角装は保存良好で好資料であり、三山木の刀子も恐らく此の様な柄が着装されていたと推察される。いずれにしても三山木の刀子は住居址床面出の実用品であり、且つ完形品で、弥生式後期の鉄製刀子の形態を知る上では貴重な資料である。更に弥生式時代に続く古墳時代の刀子が一般に短く、切先が鋭くなってくるが此の様な形態の変化が機能の変化を意味するであろうし、古墳時代の刀子との編年的分類が今後の問題として残る。

刀子と関連して見られる遺物に砥石がある。磨製石器の出土を見なかったので此の砥石も金属利器のためのものと見られる。石質によって荒砥石から仕上げ砥石までの用途がうかゞえ金属利器との関係が濃厚である。

以上の様に今回の調査は住居址一基のみで、三山木弥生式遺跡の極く一部をのぞいたに過ぎない。従って幾多の未解決の問題を残している。しかしながら本邦に類例のない青銅器や鉄製刀子その他の出土は弥生式時代後期の竪穴式住居址として、亦三山木弥生式遺跡全体が重要な意義を持つ。後日遺跡の全面調査が行なわれ全貌が明らかになることを期待する。(1967.11.11 山田良三)

註1 田辺昭三、佐原真「近畿」『日本の考古学Ⅲ』弥生式時代 昭和41年

註2 宇佐晋一、西谷正「巴形銅器と双脚輪状文の起源について」古代学研究 20、1959



三山木弥生式遺跡遠望（矢印遺跡）

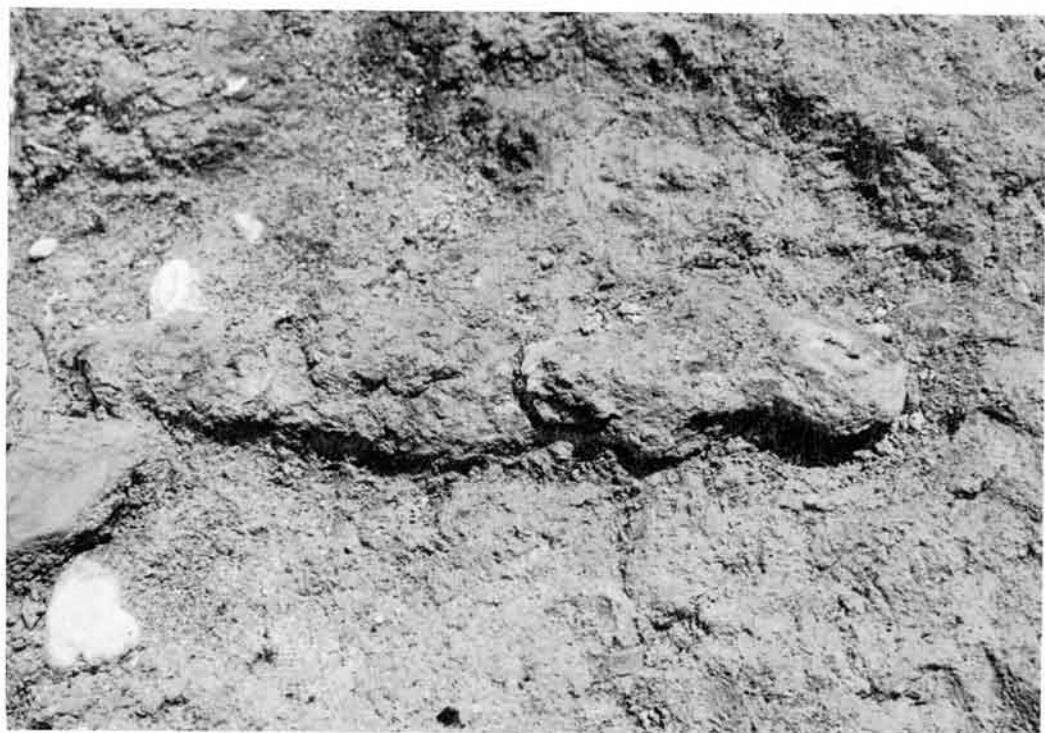


竪穴式住居址全景

図版 1



異形青銅器出土狀況



鉄製刀子出土狀況

図版 2

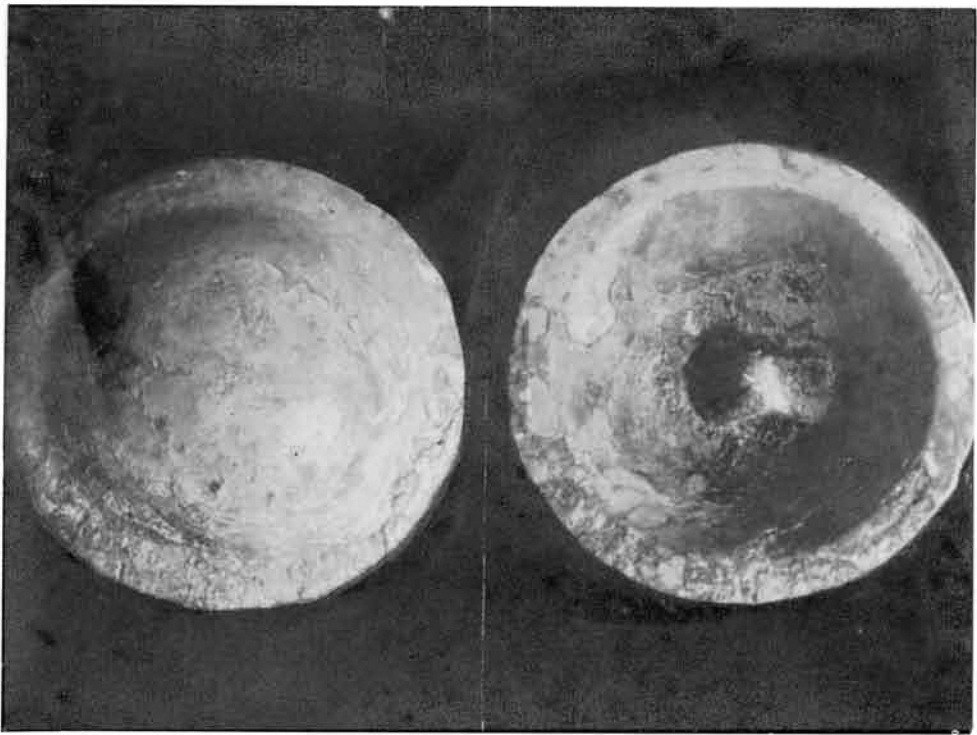


弥生式土器、砥石出土状况

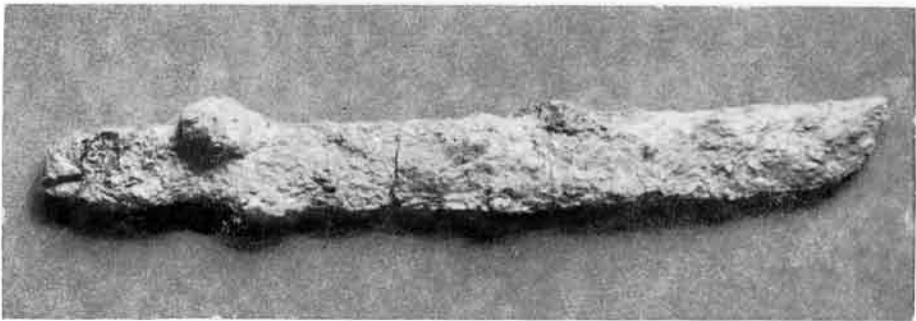


弥生式土器出土状况

图版 3



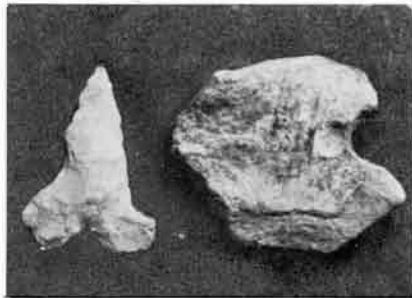
異形青銅器



鐵製刀子



鐵器片



石鏃

石庖丁片

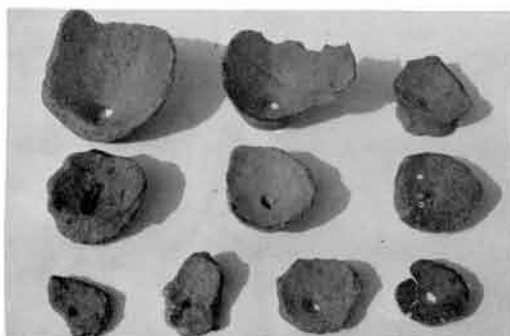
金屬器と石器

図版 4



弥生式土器(其の1)

図版5



弥生式土器(其の2)

図版 6

昭和43年5月1日発行

執筆者 京都府立城南高等学校
山田良三

発行所 京都府綴喜郡田辺町
田辺町教育委員会
田辺町文化財保護委員会

印刷所 (有)岩上印刷
京都府宇治市宇治妙楽